

マルコによる福音書8章「イエスを見る目」

1A イエスに見えるもの 1-27

1B イエスご自身による四千人給食 1-10

2B 深いため息の出る不信仰 11-12

3B 弟子たちにも入り込んだパン種 13-21

4B 二段階の開眼 22-26

2A イエスの使命 27-38

1B 自分自身が告白するイエス 27-30

2B いのちに代わる大切なもの 31-38

本文

マルコによる福音書 8 章を見て行きます。私たちは前回、7 章においてイエス様の一行が、ツロの地方に行かれたところを見ました。そこで、異邦人が、悪霊につかれた娘から悪霊を追い出してほしいと願いましたが、その女の信仰によって、悪霊をイエス様は追い出してくださいました。そして、ガリラヤ湖のデカポリス地方のほうに行かれました。ガリラヤ湖は、東側がデカポリス地方になっており、その住民は異邦人が多くいるところです。あのレギオンを追い出した奇跡は、ガリラヤ湖の東岸で行われました。そして 8 章に入ります。イエス様は、異邦人の多くいる東側のほうで、かつての五千人に対する給食と似た奇跡を行われます。

1A イエスに見えるもの 1-27

1B イエスご自身による四千人給食 1-10

1 そのころ、再び大勢の群衆が集まっていた。食べる物がなかったので、イエスは弟子たちを呼んで言われた。2 「かわいそうに、この群衆はすでに三日間わたしとともにいて、食べる物を持っていないのです。3 空腹のまま家に帰らせたなら、途中で倒けなくなります。遠くから来ている人もいます。」

「大勢の群衆が集まっていた」とありますが、レギオンを追い出していただいた男がその地方全体に起こったことを言い伝えていたので、それでイエス様の名が伝わっていたのかもしれませんが。そして、イエス様の働きにある大きな動機、「かわいそうに」という言葉があります。スプランクニゾマイと言いますが、これは腸(はらわた)を表す言葉で、「腸が痛みそうだ、この群衆のために」と言っているようなものです。聖書には、主なる神は「情け深く、あわれみ深い。(詩篇 111:4)」とあります。その深い憐れみを、イエス様にあつて神は表しておられます。三日間、食べる物を持っていないのに、それでも主のみことばを聞き、そのなされる奇跡を求めていました。いかがでしょうか、主のみことばを聞くために、食べることを忘れる、また食べるお金がないのにそれでも御言葉を聞いているという、霊的に飢え渴いた状態です。それでイエス様は、彼らに深い憐れみを抱かれたのです。

しかし五千人の給食の時は、弟子たちのほうがイエス様に、彼らを解散させて、食べる物を買うように語りかけていました。弟子たちは、その時のような関心が内容に感じられます。異邦人が多くいるところだからではないのか？と思います。自分たちの領域ではない、自分たちが関わるような人々ではないという差別が、心の中にあっただのかもしれませんが。けれども、イエス様はツロで出会った女に対して、ご自分の業を行われたように、異邦人に対しても憐れみを示しておられます。私たちの神はえこひいきされる方ではありません。

4 弟子たちは答えた。「こんな人里離れたところで、どこからパンを手に入れて、この人たちに十分食べさせることができるでしょう。」5 すると、イエスはお尋ねになった。「パンはいくつありますか。」弟子たちは「七つあります」と答えた。6 すると、イエスは群衆に地面に座るように命じられた。それから七つのパンを取り、感謝の祈りをささげてからそれを裂き、配るようにと弟子たちにお与えになった。弟子たちはそれを群衆に配った。また、小魚が少しあったので、それについて神をほめたたえてから、これも配るように言われた。8 群衆は食べて満腹した。そして余りのパン切れを取り集めると、七つのかごになった。

五千人の給食の時と同じです。五千人の時は五つのパンが手元にありましたが、ここでは七つのパンがあります。そして小魚も僅かながらあります。そして人々を地面に座らせています。そして、感謝の祈りを捧げていますが、五千人の給食においては、神をほめたたえたことが書かれています。これはユダヤ人が食前の時に主をほめたたえ、また感謝する祈りを示しています。そして、大事なのは弟子たちにこれを配らせていることです。つまり、弟子たちはイエス様の奇跡に自分たちも関わる事ができていることです。

そして、同じように彼らは満腹になりました。余ったのは、かごに七つとあります。けれども、英語では large baskets とあり、大籠と書かれています。五千人の給食では、コピノスという普通の籠なのですが、ここではスプリスという、穀物を貯蔵する籠です。パウロがこの籠を使って、ダマスコの城壁から降り降ろされました(使徒 9:25)。ですから、五千人の給食では 12 の籠に一杯になったのですが、量的にはこちらのほうが、もっと多く余っていたこととなります。

9 そこには、およそ四千人の人々がいた。それからイエスは彼らを解散させ、10 すぐに弟子たちとともに舟に乗り、ダルマヌタ地方に行かれた。

イエス様は、五千人の給食の時もそうでしたが、すぐに彼らを解散させました。イエス様は、憐れみを示されますが、それは必要に事欠いているからです。けれども、もう満ち足りた彼らがしようとする事は、ユダヤ人たちの場合は王に担ぎ上げようとしたことであつたし、またもっとパンを欲しがっていたからです。ここでも、もっとパンを欲しがったのかもしれませんが。人は弱いものです、必要が満たされるだけで満足するのではなく、それ以上が欲しい、つまり欲を出すのです。イエス様は、欲を満たすことはなさいません。

そして、弟子たち共に、「**ダルマヌタ地方**」に行かれています。これはガリラヤ湖の北西です。マグダラの方面になります。今でも、ミグダルという名で遺跡の発掘が進んでおり、イエス様がおられた一世紀の頃のシナゴグの跡も掘り起こされています。ユダヤ人の町でした。

2B 深いため息の出る不信仰 11-12

11 すると、パリサイ人たちがやって来てイエスと議論を始めた。彼らは天からのしるしを求め、イエスを試みようとしたのである。12 イエスは、心の中で深いため息をついて、こう言われた。「この時代はなぜ、しるしを求めるのか。まことに、あなたがたに言います。今の時代には、どんなしるしも与えられません。」

パリサイ人たちがやって来ました。彼らはイエスを再び試して、陥れようとしていました。天からのしるし、とのことですが、つまりはイエスが神からの者であるならば、そのしるしを見せろというのです。これまで、どれほどの徴を彼らは見て来たことでしょうか！けれども、彼らはそれらは地上の徴だ、天からの徴を見せなさいと言うのです。

イエス様が、深いため息をついておられます。これは、7 章で、耳が聞こえず口がきけない人を癒された時にも、「**天を見上げて、深く息をして**」とありましたが、それに相通じるものがあるでしょう。彼らは目があって、耳も聞こえ、口もきけますが、霊的にはすべてに障害があるかのようにされています。イエス様は、「この時代」「今の時代」という言葉を使われていますが、「世代」と言い換えてもいいかもしれません。イスラエルが荒野の旅をしている時に、その世代がみな滅びるために四十年、さまよいましたが、同じように、神が訪れているのに、心を頑なにしているその世代には、徴は与えられないと断言されています。徴はあるのです、数多くあるのです。最後の徴は、イエスご自身の復活です。けれども、どんなに徴があっても、もはや心を開くことはないので、「**どんなしるしも与えられません。**」と言われました。

徴とは、心を開いてこそその徴であります。神を求める人には、それらの奇跡が神が生きておられることを指し示すものであり、その人が神への信頼を持つことができます。けれども、初めから神に対して心を開くつもりがなければ、どんな証拠を見せられても無理なのです。

3B 弟子たちにも入り込んだパン種 13-21

13 イエスは彼らから離れ、再び舟に乗って向こう岸へ行かれた。

イエス様は、ユダヤ人の居住地に戻って来られたものの、この反対に遭ったので再び向こう岸に戻って来られました。

14 弟子たちは、パンを持って来るのを忘れ、一つのパンのほかは、舟の中に持ち合わせがなかった。15 そのとき、イエスは彼らに命じられた。「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種には、くれぐれ

も気をつけなさい。」

午前礼拝でお話したように、イエス様は、二つの反対に直面しておられました。宗教的な反対と、政治的な反対です。ヘロデ・アンティパスが、イエス様に大勢の人々がついて行く運動に、脅威を覚えていました。バプテスマのヨハネの甦りだと思っていました。そして、ヘロデのようにローマの慣習や風習を取り入れて、神の律法をないがしろにすることも、主なる神への献身のゆえに拒むというのは、ヨハネのみならずイエス様もそうでした。世で行われていることを、主について行くために行わないということは、時に人々に脅威を与えます。それで反対されたり、迫害されたりしますが、それやってもいいのだという教えは偽りであり、それがパン種のように教会を蝕みます。

それで、イエス様はガリラヤの地域をしばらく避けていました。けれども、相変わらず、律法主義を教えているパリサイ人たちから、挑みかかられたのです。こちらもパン種であり、全体を腐らせてしまいます。しばしば言われることですが、教会に迫害が来ても、教会は清められるだけです。しかし教会をだめにしてしまうのは、偽りの教えです。福音に混ぜ物をしてしまうことであります。

16 すると弟子たちは、自分たちがパンを持っていないことについて、互いに議論し始めた。17 イエスはそれに気がついて言われた。「なぜ、パンを持っていないことについて議論しているのですか。まだ分からないのですか、悟らないのですか。心を頑なにしているのですか。18 目があっても見えないのですか。耳があっても聞かないのですか。あなたがたは、覚えていないのですか。」

イエス様は、ここで、心の頑なさ、鈍さが、ご自身と共にいる弟子たちにさえあったということです。イエス様が嘆かれているのは、イスラエルの民に対して使われていた表現です。「イザ 42:18-20 耳の聞こえない者たちよ、聞け。目の見えない者たちよ、目を凝らして見よ。わたしのしもべほど目の見えない者が、だれかほかにいるだろうか。わたしが送る使者ほど耳の聞こえない者が、ほかにいるだろうか。わたしと和解した者のような目の見えない者、【主】のしもべのような目の見えない者が、だれかほかにいるだろうか。あなたは多くを見ながら、心を留めない。耳が開いているのに、聞こうとしない。」主のしもべなのに、聞いていません、見えていません。

19 わたしが五千人のために五つのパンを裂いたとき、パン切れを集めて、いくつのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えた。「十二です。」20 「四千人のために七つのパンを裂いたときは、パン切れを集めて、いくつのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えた。「七つです。」21 イエスは言われた。「まだ悟らないのですか。」

あまりにも明らかな事実です。五つのパンから五千人に給食し、十二のかごに余りました。七つのパンから四千人に給食し、七つの大籠に余りました。ですから、一つのパンしか持っていなかったことで、イエス様がとやかく言っているのではないことは明らかなのです。ちなみに、十二というのはイスラエル十二部族を示していることでしょう、七というのは完全数、神の数で、異邦人もお救いになる

神の御心を表しているのかもしれませんが。

二つの給食の奇跡を見るに、弟子たちが驚いていないことに驚きます。水の上を歩かれた時は、彼らは恐ろしくなるほど驚きましたし、どうしてなのでしょう？これはおそらく、あまりにも自然に行なわれていたからでしょう。目立つ形でパンや魚が増えて行ったのではないのでしょうか。このように、主が行われる奇跡には、あまりにも自然な形で行われるので超自然であることを気づくことがないことさえあります。しかし、それでも彼らはあまりにも鈍すぎます。

ところが、私たちにもこのような鈍さはいつでも襲って来きます。イエス様が何もしてくれないと感じているのであれば、実は、イエス様があまりにもそばにいて、沢山のことをしてくださっていて、それで心が逆に無感覚になって、その奇跡に気づかないということがあるのです。私たちが信仰生活を漫然と暮らしていると、このようなことが起こります。驚くべきこと、すばらしいこと、称賛に値すること、そういったことは目を覚まして、主を熱心に求めている中で、見出すことができます。漫然としていること、みことばは読んでいるけれども、本当に読んでいない。祈っているかもしれないけれども、心から祈っていない。イエス様の恵みに心を留めないこと、必ず心が鈍くなります。目があるのに見えない、耳があるのに聞こえないと言うことが起こるのです。

4B 二段階の開眼 22-26

22 彼らはベツサイダに着いた。すると人々が目の見えない人を連れて来て、彼にさわってくださいとイエスに懇願した。

ベツサイダに着きました。ベツサイダは「漁師の家」という意味で、ペテロとアンデレ、またピリポの出身の町であります。ガリラヤ湖の北東、ヨルダン川がガリラヤ湖に入っていくところのちょうど、東にあります。ここは、ぎりぎり、ヘロデ・アンティパスの領地ではなく、ヘロデ・ピリポの領地です。ですから、危害が加えられることは避けられるでしょう。そこに、目の見えない人に触ってくださいとお願いしてくる人々がいました。7 章でも同じように、人々が連れて来た人がいましたね、耳が聞こえず、口がきけない人です。

23 イエスは、その人の手を取って村の外に連れて行かれた。そして彼の両目に唾をつけ、その上に両手を当てて、「何か見えますか」と聞かれた。

イエス様は、耳が聞こえず、口がきけない人に対してもしたように、人々の中から連れ出して、個人的に語りかける私的な空間を作られます。これは、イエス様が個々人を大事にしておられて、その人の信仰が築き上げられるようにするためです。他の人々は、まだそこまでイエス様を信仰しようとは思っておらず、病院のお医者さんか、病気を治す奇跡の人ぐらいにしか考えていなかったのでしょうか。ですから、その人の心に優しく語りかけて慰めを与えるべく、私的な場を設けられました。それから、「唾をつけ」ています。耳が聞こえない人にも、ご自分の唾を舌に付けられました。これは、人を癒す

時につかう仕草だったのでしょうか、癒しますよ、という意味をその人に見せたのです。

24 すると、彼は見えるようになって、「人が見えます。木のようにですが、歩いているのが見えます」と言った。25 それから、イエスは再び両手を彼の両目に当てられた。彼がじっと見ていると、目がすっかり治り、すべてのものがはっきりと見えるようになった。26 そこでイエスは、彼を家に帰らせ、「村には入って行かないように」と言われた。

この癒しの奇跡は、イエス様の行われた癒しの中で、とても稀なこと、いや唯一のもので、段階的に治しておられます。他の奇蹟はすべて、すぐに癒すものであり、完全に治るものでした。ところが、ここでは初めに唾を目に付けて、両手を当てられた時は、人が木のようにしか、ぼんやりしか見えませんでした。二回目に、両手を両目に当てたら、目がすっかり見えるようになりました。これは、イエス様に癒しの力が足りなかったのでも、相手に信仰が足りなかったのでもないでしょう。

霊的な意味があります。デカポリス地方において、弟子たちがパンの奇跡について悟っていなかったこと、そしてこれからイエス様が、ピリポ・カイサリアでご自分を何というのか？と弟子たちに聞かれることに関わるのです。弟子たちの霊的な状態がまさにそうでした。主のしもべであるはずなのに、目があっても見えていませんでした。今は、一回目の癒し、ぼやけてしか見えていませんでした。イエス様のお姿について、それほどはっきりとしていなかったのです。二回目の癒しは、イエス様の復活の時に来ます。「それからイエスは、聖書を悟らせるために心を開いて(24:45)」と、ルカ伝にあります。ですから、私たちが、どれだけイエス様を見ているかどうか？が問われています。イエスがどのような方であり、何を行われているのかを、いろいろなことから見えているか？また、神がどのように語られているのかを聞き取っているのか？イエス様が見えていれば、それだけ自分がどうすればよいか分かります。見えていなければ、空回りしたような生活になってしまいます。

そして、これまでの癒しを見ていると、イエス様がいろいろな方法を使われていることを見ましたね。聖霊の働きはいろいろです。型に当てはめることができません。私たちは、常に主がどのように働いておられるかに敏感になり、それに素直に従う柔軟性を持つ必要があります。

2A イエスの使命 27-38

そこで次に、マルコによる福音書で大きな分岐点に差し掛かります。これまで、イエス様は人々に必要に応えられて、それを満たすことで仕えられる、神のしもべのお姿でありました。これからは、十字架の死に至るまで神に仕えられる姿、同じ仕える姿なのですが、イエス様がメシアとして、キリストとして行われることは、私たちの罪の代価のためにご自身の命を差し出すことです。

1B 自分自身が告白するイエス 27-30

27 さて、イエスは弟子たちとピリポ・カイサリアの村々に出かけられた。その途中、イエスは弟子たちにお尋ねになった。「人々はわたしをだれだと言っていますか。」

ベツサイダからピリポ・カイサリアは、まっすぐに北上します。今でも聖地旅行では、よく訪問する場所です。大体 80 キロあります。そこは現在、パニアスと呼ばれています。イスラエルの最北端、ヘルモン山の南側の山麓にあります。ヨルダン川には四つの水源がありますが、その一つがここから流れ出るパニアス川です。そしてそこに行くと見えるのが、異教の神、パンと呼ばれる神の聖所です。泉の洞穴があり、そこに犠牲のいけにえを捧げていたと言われます。そこからパニアスと呼ばれ、現地のアラブ人が P の音が発声できないので、B に変わり、パニアスと呼んでいます。

新約聖書の時代に戻りますと、紀元前 20 年にヘロデ大王が、皇帝アウグストからこの町を与えられました。その子の一人が、ヘロデ・ピリポであり、彼が町を拡張し、美化して、皇帝テベリウスに敬意を表すために、カイサリアと改名しました。地中海沿いに、ローマ総督が駐屯していたカイサリアがありますね。そこで区別するために、ピリポ・カイサリアと呼ばれています。ですから、他のローマの異教の町と同じように、ギリシア神話に基づく神々や、皇帝崇拜が行われているところでした。イエス様は、弟子たちにご自身のことを明かすために、ユダヤ人からも、ヘロデ・アンティパスからも離れた、なるべく安全な場所を選ばれたものと考えられます。

28 彼らは答えた。「バプテスマのヨハネだと言っています。エリヤだと言う人たちや、預言者の一人だと言う人たちもいます。」

イエス様は、弟子たちと歩かれながら、途中で立ち止ったのでしょう、「人々はわたしをだれだと言っていますか。」と聞かれています。弟子たちは、ユダヤ人たちの間の噂は耳に入っていますから、それを答えています。ヨハネは、ヘロデ・アンティパスが恐れていたほどですから、それはすぐわかります。エリヤは、ヨハネがそうではないか？と思われていたほどで、これも分かります。預言者の一人とは、モーセのような預言者のことです。

29 するとイエスは、彼らにお尋ねになった。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」ペテロがイエスに答えた。「あなたはキリストです。」30 するとイエスは、自分のことをだれにも言わないように、彼らを戒められた。

「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」ここで強調されているのは、「あなたがたは」であります。他の人々が言っていることについては、簡単に答えることができたでしょう。けれども、「では、自分はどのようなのですか？」という問いかけには、どう答えるのでしょうか？ここが、先ほどの漫然としていることでは決して見出せない答えなのです。これまでのイエス様の行い、またその言葉によって、イエス様が誰なのかが見えて来るはずなのです。ペテロは、天からの助けで、「キリストです」とはっきりと答えることができました。

当時のユダヤ人たちは、キリスト、ヘブル語でメシアですが、メシアをどのように捉えていたのでしょうか？私たちは旧約聖書の学びのことを思い出さないといけません。イスラエルの王には、愛され、

選ばれたダビデがいました。その子ソロモンが平和と繁栄の王国を作りました。しかし、その後、王国は分裂し、北のイスラエル王国はアッシリアによって倒れて、民は捕え移されました。南のユダ王国は、バビロンによって捕え移されました。メシアとは、「油注がれた者」という意味ですが、人が神によって王として任命を受ける時、預言者として、また祭司として任命を受ける時に、油注がれます。その人によって、人に救いをもたらす存在です。ユダ王国が、バビロンによって滅ぼされる直前に、預言者エレミヤがダビデのような方が再び起こされる、つまりメシアが来ることを次のように預言しています。「23:5 見よ、その時代が来る。——【主】のことば——そのとき、わたしはダビデに一つの正しい若枝を起こす。彼は王となって治め、栄えて、この地に公正と義を行う。」そして、バビロンにおいてダニエルが、この方がこれまでの異邦人の国々を粉々に打ち砕き、大きな山、大きな王国となって世界を支配されることも預言しました。

バビロンから帰還後、ユダヤ人は続けて、異邦人の国々に踏み荒らされていきました。ペリシアの次はギリシア、ギリシアの次はローマです。紀元前 63 年に、ローマのポンペイウスがエルサレムを包囲し、攻略してからは、メシアへの思いが絶頂になりました。異邦人の力を粉々に砕いて、ダビデの王座に着かれる方が現れると切望したのです。そのような時にイエス様が現れて、数々の奇蹟を行われていました。そして、弟子たちがイエス様について行きました。そこで見た、数々の奇蹟や教えの中で、この方が確かにメシアではないかと、おぼろげに見えていたのです。

2B いのちに代わる大切なもの 31-38

しかし、イエス様は、ご自身がメシアであることは誰にも言わないようにと強く戒められます。弟子たちの期待を根本から裏切るようなことをイエス様は明かされるからです。

31 それからイエスは、人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。

ペテロがキリストであると、はっきりと言った後で、それでキリストであられる人の子が、捨てられて、殺されなければいけないことを語られているのです。それはローマによる十字架の磔であり、彼らの信じていたメシアとは、あまりにもかけ離れている姿です。しかし、「三日後によみがえらなければならない」とも言われているのです。何もかもさっぱり分からないご発言であつたに違いありません。

ユダヤ人の指導者が列挙されていますが、一つは長老たちです。これは、ユダヤ民の一般の人たちに受け入れられていた指導者たちであり、パリサイ派の人たちが主でしょう。そして、祭司長たちは、サドカイ派の人たちで神殿を管理しており、ローマとやりくりして政治的に神殿礼拝を守っていました。そして、律法学者は聖書に精通している者たちであり、彼らも権威です。ですから、ユダヤ人の指導者たちが、イエスをメシアとして受け入れるどころか見捨てて、ローマに明け渡すのです。さらに、ローマを打ち砕くのではなく、むしろ他の熱心党员など、ローマに反逆する者たちと同じように十字架刑に処せられて殺されるのです。

イエス様は、これまでご自身が神から来られた方であることを明らかにされてきました。多くの、疑いのような証拠をもって、奇跡やしるしをもって、ご自身が神からの方であることを示されました。しかし、その全能の力を働かせておられた方が、仕える姿を取り、人々のいのちの贖いをされます。罪と悪魔に売り渡されている人々を、ご自分の命を身代金として差し出し、それで私たちが神のもとに引き取られるためです。10章45節で、弟子たちにイエス様はこう明かされています。「人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」

32 イエスはこのことをはっきりと話された。するとペテロは、イエスをわきにお連れして、いさめ始めた。33 しかし、イエスは振り向いて弟子たちを見ながら、ペテロを叱って言われた。「下がれ、サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

ここで主従関係が変わってしまっています。イエス様がペテロを引き寄せて諫めたのではなく、ペテロがイエス様を引き寄せて諫めています。ここでペテロが、どうなってしまったのか？と言いますと、ペテロが、イエス様がキリストであると言ったことによって、自分がよりイエス様に近いものとなったのだと思います。そうではなく、マタイ伝によれば、それは天から与えられた悟りだったのです。まるで自分がイエス様のそばにいる、イエス様に助言さえする側近であるかのように考えてしまったのかもしれない。私たちは、ある意味で近づきすぎてはいけません。イエス様に近づきすぎてはいけません。それはどういう意味かと言いますと、イエス様は神の御子であられて、私たちは僕です。この方は私たちが愛されて、多くの恵みをくださいます。しかし、それは自分がイエス様のようになった、イエス様と同じところにいることではありません。これは、お互いにもそうなのです。主にあって、私たちは互いに交わっています。主にある、というところに距離があります。直接はつながれないのです。そして、直接、近づいてしまうと、そこには傲慢の思いが入ります。自分が何か特別なところに置かれたかのように考えるのです。

しかし、イエス様がなんと、「下がれ、サタン。」と言われている。ペテロは良かれと思って、語ったに違いありません。「あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」とイエス様は言われています。人のことを思っているのだからそれは間違いなの事だ、と絶対視したらどうでしょうか？イエス様が殺されるということは、あってはならないとすることは、誰でも願うことです。けれども、神のみこころがそうなのであれば、人の思いがどんなであろうとも、それを退けなければいけません。神の御心がそうであるのに、それでも「それはあってはならない！」と抗議するならば、その背後には、サタンがその思いを吹き込んでいるのです。サタンは巧妙です。人にとって、正しいこと、好ましいと思われることに忍び込みます。そして、神の御心を悪いもののように思わせます。

34 それから、群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしに従って来たければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」

この「群衆」は、十二弟子以外の他の弟子たちのことでしょう。ペテロのように、近い人間でさえ、イエス様の言われていることに躓いているのですから、イエス様は今、そこに付いてきている弟子たち全員に対して、「わたしについて来たいなら、来なさい」と呼びかけておられます。それは、半ば突き放している面もあります。

そして、ここでイエス様が言われているのは、「最も邪魔になるのは、自分だ」ということです。敵はローマでもなく、ユダヤ人指導者でもなく、自分というものだ、ということです。自分の在り方を捨てるということです。それをパウロが、ピリピ人への手紙で説明しました。「ピリ 2:6-8 キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられぬとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。」神のお姿であられるのに、それを捨てて、神のしもべとして十字架の死にまで従われていきました。

そしてもう一つは、「自分の十字架を負って」という部分です。自分というのは、自己主張をします。なんとしてでも、自分というものを突き通そうとします。しかし、ちょうど熱心党の者たちがローマに武力で戦っても、ローマ兵によって制圧させられ、そして十字架に磔にされてしまうように、自分というものが、十字架に付けられていないといけないということです。自分がいかにじたばたしようが、神の主権の中に従わせるということです。今の時代は、服従するということを非常に嫌います。自分の感じたこと、自分の思っていることが正しく、それを否定されるものなら、どんなに攻撃的になっても正当化されると思っています。自分の考えていることは神聖不可侵なのです。しかしそれこそが、終わりの日の反キリストの姿であり、あらゆる神々にまさって自分を高めるのです。このようにして、イエス様に付いて行くということは、自分を退ける歩みであります。

35 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。

私たちには生存本能があります。自分の命を救おうとします。しかし、キリスト者とはどのような存在か？それは、イエス様とその福音を知り、その中で自分の命を失う人物です。自分というものが、神の前で絶対的に罪深く、それゆえにキリストの十字架が、全く良きものがない自分のために死んでくださったということ。そして自分の為だけでなく、自分自身が十字架に付けられていることを知ります。そして、キリストが甦られたということが、自分にとっての生きる希望になっています。自分は十字架につけられ、生きているのはキリストを信じる信仰によってであります。これが、イエス様と福音のためにいのちを失うことです。そのように生きる者は、いのちを救います。永遠のいのちを得ています。

36 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったら、何の益があるでしょうか。37 自分のいのちを買い戻すのに、人はいったい何を差し出せばよいのでしょうか。

自分のいのちが、どこにあるのか？を問いかけている御言葉です。命あってこそ、財産です。けれども、その逆になります。何か自分が得たいと思っていることのために、自分の人生にとって最も大事なものを失ってしまいます。エサウのことを思い出してください、エサウが一杯のレンズ豆のスープと引き換えに、長子の権利をないがしろにしました。罪の楽しみのために、永遠のいのちの賜物を受け入れるのを拒む人が数多くいます。たった今の世の楽しみを優先させて、将来くる世界、死んだ後にも甦って与えられる世界、永遠を犠牲にしてよいものなのでしょうか？

そして、自分のいのちの値段はいくらなのでしょうか？ 買い戻すと言っても、いくら払えばよいのでしょうか？ 私たちの人生はあまりにも、安価なものといのちを引き換えにしています。それはまるで、絵画のオークションで、有名な画家のものだと思って買ったが、偽物だったというようなものです。価値のないもののために、高価な命を支払ってしまったのです。いのちに対しては、いのちという対価が必要です。しかも、罪を贖うためには、罪ある命ではなく、罪のない人生、いのちと引き換えにしなければいけません。それで、主イエスのいのちが差し出されたのです。

38 だれでも、このような姦淫と罪の時代にあつて、わたしとわたしのことばを恥じるなら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るとき、その人を恥じます。」

イエス様が、「このような姦淫と罪の時代」と言われているのは、イスラエルの民がまことの神から離れて、他のものを求めてしまっている時の状態のことです。イスラエルが偶像礼拝を行っている時に、霊的に姦淫の罪を犯していると断罪されました(例: イザヤ 57:1)。目に見える偶像は、ユダヤ人指導者は拝んでいませんでした。けれども、神なる主以外のものを大事にして、神の代替にしているのです。神以外のものを大事にしている時に、私たちの心はキリストに対して目が閉ざされていることになります。

そしてそのような時代の時に、福音の真理を語ることは困難を伴います。「わたしとわたしのことばを恥じる」とイエス様が言われますが、いかがでしょうか？ イエス様のことを口にして、また行いによって示しておられるでしょうか？ もちろん、無理やり、時と場をわきまえず言うことは失礼になります。けれども、自分が生きている理由がイエス様であれば、自ずと自分の家族や職場、学校、知り合いや友人に話しているはずで、もしそうしていないのならば、恥じていることになります。主のことばが、いかに自分を不利にさせようとも、恥としてはいけません。弟子たちの時代に、苦しみを受けるキリストを伝えることが、人気を博するのでしょうか？ いいえ、あざけりや、時には命の危険にさえなることです。それは、人の子が来られる時、つまり再臨される時に、私たちが報いを受けるためです。栄光に輝いている御国が到来します。世の栄光は過ぎ去ります。この地上で、自分の主がイエスであることを堅持したからこそ、主が来られる時に主も自分をご自分のものであると言い表して下さるのです。

このようにして、イエス様のお姿が御霊によってはっきり見ている生活を送る時に、終わりの日にも恥じることなく、この方に顔と顔を合わせてまみえることができます。